グヴィドン

　グヴィドン
カモシカがはしゃいでいる、
小川が走っている。
君の計り知れないほど
大きな瞳よりも
ぼくにとって愛しく貴いのは
からかうようなその眼差しだ
君のもやもやした希望
頑ななリーザの希望よりも
君の沈黙　君の気紛れは
ぼくを焦らしたりはしない

　リーザ
一人の乙女が
森に住んでいました
私とふざけっこして遊んで
ご馳走がいっぱい並べられた酒盛りに招待してくれました
石に埋もれて躓いている両足を
そこでぴょんと跳びはねたいとは思いませんでした
やっとのことで聞こえるような声で喋りました
手を擦りむきたくないの
私はモミの木の下で震えていました
じめじめした松の木の間を
茂みの中を歩き回るのは良くないわ
あんよがすぐに痛くなるの
霧が頭の中にかかってきて
魂は空へ飛び去ってゆきます

　グヴィドン
松がきしきし音を立てている
菩提樹がぎしぎし音を立てている
空気はガルドン河
風は軽いドン河

外套がバタバタいっている
モミの木がクルクル回っている
雪が降っている
ねぐらで安逸をむさぼっている
馬の思考が
ぼくの中に入り込んでくる
70 センチの
鞭と水差しが持ち込まれる
ぼくは一緒に繋がれている
まるで馬みたいだ
空気は弓なり
風は言いなり

　リーザ
朝になれば
尖塔の鐘が鳴る
おばさんと一緒に教会へ出かける時間だわ
見て　たくさんの人が歩いてる　ほら
私の座るところは左の隅っこ
マグダラのお膝元
見て　下の方　牧人のエヴァが
谷を急ぎ足で過ぎてゆくわ
司祭様は厳格なお方
私が遅刻すると　罰をお与えになり
牢に閉じ込めておしまいになる
そして絹をほどくようお命じになる
ひょっとすると司祭様は私を処刑してしまうおつもりかもしれない
もしかするとグヴィドンは私を一刻も早く助け出そうと急いでいるところかもしれない

　魔女
麗しい涙が幾筋も流れてゆく
泣くのはよせ　森にいる方がましだ
冬の雪みたいに堆く聳える苔の山にいる方が
リーザ、あたしたちは逃げるんだ
二人がかりで啄木鳥を殺してしまおう
その血を啜り

羽根を風に飛ばそう
夜には　あたしたちは洞穴の中
くっついていれば　そこだって暖かい
夢を見る時間だ　鷲は寝入っている
あたしたちは眠り込む　鷲寝入り
お前が目を閉じれば、あたしは
リーザ、お前に魔法をかけてあげよう
皆は眠りこけ　夜は更けてゆく
さあ　さっさと遠くへずらかるぞ

　リーザ
何だか恐ろしいわ
あんたと逃げるのは
行きたいのは逆の方なの
家に帰りたいわ
でも　足が曲がってしまって
背骨がぎしぎし言うの
神様　お助けを！
進め　進め

　森の案山子
ははは！
どこへ急いで行くんだね
思考は浮かばれ
石はくたばれ

　リーザ
あなたは誰なの　森の案山子さん
善い天使なの　それとも悪いお化けなの

　森の案山子
娘さん　道に寝転んで
膝を持ち上げてみなさい
空の一番高いところからは見えない
お前の優美な踝は。

　リーザ
悪霊め　ここはお前の住処ね
苔に灌木の茂み
赦して　やんごとなきお方
聖アウグスティヌス。

　森の案山子
ほほほ

　グヴィドン（眠りから覚めて）
ここはどこだ？　ここはどこだ？
ああ　ぼくの部屋か
夢に萌した想念は
高貴な馬の思惟だった
蹄で牢獄を蹴破り
川沿いを走りに走る
ぼくは森　鷲　稲妻を見る
自然の法則に逆らって
槍のように天を衝く稲妻を
修道院の鐘の音が聞こえる
罪を許し給えと祈るために駆けずり回る
山上の教会の修道士たちは
聖アウグスティヌスの漆黒の僧服に接吻して
一瞬だけ苦悩を忘れる
それからリーザを一瞥し
修道士たちは水路橋を駆け回る
早く　早く　長靴を履くんだ
グヴィドンよ　修道士たちと共に駆けろ
グヴィドンよ　修道士たちと共に駆けろ
急いで　急いで　かけろ　けろ

　聖アウグスティヌス
夜が明ける
花々には
丸々肥えたミツバチたち。
陸地は

クジラたちの方を向く
あたかも母親の胎内で
赤子がごろんと向きを変えるように
その顔はつるりとしている
母親はそっと大事に
へその緒から栄養を送っている。
見ろ　太陽が真横まで昇ってきた
ミサが始まる
鐘楼から二人の鐘撞人が
肩を並べて遠ざかる。遠からぬ日
小雨が明け方までしとしと降り続いていた日。
さあ教会へ。

　修道士たち
われらが　われらが元へ
神の御使いがお越し下された
その方のためにござを敷いて御座候
祭壇までの道のりに
歌えよ　修道士たちよ。「Virgo Maria 聖母マリア」を

　修道院長
夜が明ける

　聖アウグスティヌス
私はまだ遠くにいる。
小高い丘は
既に越えた
小聖堂も後にした
ほら　修道院だ
ほうら　井戸だ
胸の内がぜいぜいする。
悲しいかな　老いさらばえた足が
身体の下で折れ曲がっている
思惟が頭から旅立ってゆく
心臓が動かない
地面が額にまでせり上がってくる

修道士たちよ　棺を持て
（倒れる）

　修道士たち
外で誰かが倒れおった
ああ、修道士たちよ
神は大きく小さい
ハレルヤ
死と友と敵共
ああ　修道士たちよ
神は明るく暗い
ハレルヤ
死とは墓を拵える技師である
ああ　修道士たちよ
神は猛々しく柔和だ
ハレルヤ
軟らかいものと硬いものが崩れ落ちる
ああ　修道士たちよ
だが神と死は崩落しない
ハレルヤ。

　グヴィドン（駆け込んでくる）
リーザはどこにいるんですか？

　修道院長
まあまあ、心配召さるな
お座りなさい
いやここはいかん、バターが零れておるからな

　グヴィドン
何たることでしょう、何たることでしょう。
夜の鳥たちが
寺院の円天井を打ち破ってしまったのです
ぼくがここに慌てて駆けつけたときには
春の景色が見え隠れして覗いていました
むく毛の生えた鷲が羽搏いていて…

慌てて駆けつけたので息が切れてしまった

　修道院長
巻き煙草でもいかがかな

　グヴィドン
ありがとうございます。
つまりこういうことだったんですね、
青空をまるで旗のように
憂い顔の鷲が飛んで行った、
ぼくは無言でその後を目で追った
翼を羽搏かせてゆく方へ
風の司が針路を取った
長い長い夜の向こうへ
空気がピュッと胸を切る
長いこと　星を抜けてゆく道の
虜になりたがっているのだろうか
森の中の鷲
奈落の上の鷲
憂い顔の鷲が大笑する

　修道院長
問題を解決しないままでも
貴方に答えるのは容易なことです
大きな災いが起こり
私たちの頭上を掠めてゆきました
墓上の啾啾たる泣き声と
洗礼の鐘が聞こえてきます
やんごとなき聖アウグスティヌスが
お亡くなり遊ばしたのです

　リーザ（入ってきて）
いま森に行ってきたところよ
キツネの子とかくれんぼしたわ
お花は頭を振り振り
空にはツバメが飛び交い

池ではカエルがゲロゲロ鳴いて
私のブレスレットはガチャガチャ音を立てていた
暑かったけど
辺りを窺って　裸になるのはよしたわ
川をはしけ船が渡っているだけだったけれど
その上でお百姓さんが凧を揚げていたの
心臓の鼓動がいよいよ大きく高鳴っていった
血が逆流するみたいだった。
私は十字を切って
薄手のワンピースを脱ぎ捨てて
あそこを手で隠しながら立ち上がったわ
はしけ船の上ではお百姓さんが
指の隙間から私を見ていた
私は膝を開いて
ワンピースを枝に掛けた
もう恥ずかしくなかったわ

　グヴィドン
リーザ　そんな行いを
あなたが口にしてはいけません
ヴェーラ・ヤーコヴレヴナ・プルーストの
施設にあなたは遣られます
運命を知りたくはないのですか、それとも
運命に嫌気が差したのですか
教えてください　修道院長

　修道院長
私は神ではないし運命でもありません

　リーザ
この時代　私たちの道徳は
思うに、どこまでも堕落してしまったのよ

　グヴィドン
やめなさい　リーザ　あなたは間違っています
浮ついたまま振る舞っているんですよ

　リーザ
そうね、グヴィドン、あなたは私の婚約者だわ
婚約者の中の婚約者よ
その中から私は選んだの
詩の支配者であるあなたを
あなたを絶え間なく
苦しませるためじゃないのよ、愛しい人

　グヴィドン
ああ　これは驚いた！　でもいつものことでしょうか
あなたがこんな風なのは

　修道院長
もう空はピリピリしていません
地鳴りがすることもありません
ご覧なさい　日が暮れようとしています
寺院の円天井をつぶさに観察してはいけませんよ
惑星は巡り
海という海がうねっています
グヴィドンとリーザ
二台の馬車が
街灯の下であなた方を待っていますよ。

　リーザ
ありがとうございます　修道院長　私たちは同じ馬車に乗ってゆきます。

（グヴィドンとリーザ退場)。(修道院長は花壇に咲いているよれよれの花のしわを伸ばす。舞台裏でグヴィドンの声がする）

　グヴィドン
神の御加護があらんことを。さあやれ

1930 年 12 月 17，18，19，20 日

若干の注釈

『グヴィドン』は韻文形式で書かれた戯曲ですので、ほんの少しだけハルムスの韻文（詩）の特徴を解説しておきます。

言葉遊びが見られること。

文脈的または意味的に不可解な詩行が『グヴィドン』の中にときどき見られますが、それは音の響きと戯れた言葉遊びのようなもので、ハルムスの詩の大きな特徴です。拙訳では、ロシア語の言葉遊びを逐語訳するのではなく、日本語としても面白さの伝わるような訳を心掛けたつもりです。ロシア語における音と意味との相互作用を完全に再現するのは不可能ですが、雰囲気だけでも味わっていただきたいと思います。

句読点が極端に少ないこと。

『グヴィドン』の底本として『ハルムス全集』（サージン編）の第二巻を用いましたが、ここに収録されているテキストには、句読点がほとんどありません。ハルムスは未来派の末裔に当たる詩人なのですが、未来派の詩人たちは革新的表現を志向して句読点を省いた詩を多く書きました。その影響と見てよいでしょう。

したがって、意味の繋がりが不明瞭な箇所が多々ありますが、それこそがハルムスの狙いだと言えます。訳出する際には、読者の便宜を図るために、本来あるべき位置に句読点を打とうかとも考えましたが、あえて全集に倣いました。

ハルムスの詩や戯曲はまだ邦訳が少なく、特にこの『グヴィドン』は日本に紹介されたことがほぼないと思われる作品です。ちょっと捉えどころのないような、少し奇妙な作品ですが、「こんなのも書いていたのか」程度に思っていただければ幸いです。